

吉里吉里忌が始まってから川西町フレンドリープラザで開催していた生活者大学校ですが、今回は農村環境改善センター（川西町）にて行われました。



特集

# 吉里吉里忌 2018

ふるさと・川西町で井上ひさしを偲ぶ文学忌「吉里吉里忌」。  
4回目となった今回も盛りだくさんの内容でお送りいたしました。



群読「子どもにつたえる日本国憲法」  
第4回吉里吉里忌の閉会式にて、川西町内外の有志で結成した朗読の会「星座」が「井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法」の群読を披露しました。（詳細は6Pにて！）

## 二〇一九年春

# 井上ひさし研究会が発足します。

二〇一八年夏、井上ひさし関連の講座・講演・企画展、研究発表や出版などの情報の発信を目的とした研究会「井上ひさし研究会」の設立が決定されました。二〇一九年四月の吉里吉里忌2019に合わせて正式に発足します。

設立は、二〇一八年八月八日に東京で行われた記者会見にて発表されました。井上ひさしの妻・ユリさんは、設立に至った思いについて「井上ひさしを研究し尽くすために、専門の枠にとられず、いろいろな人たちを含めた研究会をつくる必要があると感じた」と語りました。

研究会では、遅筆堂文庫の資料の調査・研究や井上ひさしに関する研究のテーマに沿った資料の提供、講演・講座など各種イベントの開催などを行う予定です。プレイベントとして、十一月十日にトークイベント「目撃！井上ひさし神田古書店街に行く」が東京・神田にて開催されました。定員五十名の会場が満員になるほどの盛況でした（詳細は七ページにて！）。



記者会見は、東京・紀尾井町の日本文藝家協会にて行われました。

### 井上ひさし研究会 会員募集中！

井上ひさしの本を読んだことがある方・もしくは井上芝居を観たことがある方ならどなたでも入会できます。入会案内文書をお送りいたしますので、ご希望の方は遅筆堂文庫まで。  
(連絡先は11Pに付記)

## CONTENTS

### 目次

- 03 吉里吉里忌2018  
講演「わが友 井上ひさし」  
講演「井上ひさしさんとの  
いくつかの思い出から」  
生活者大学校  
テーマ「大人が学ぶ  
『子どもにつたえる日本国憲法』」
- 06 朗読の会「星座」による群読  
「子どもにつたえる日本国憲法」／次回予告
- 07 吉里吉里忌プレ企画／文庫のおしごと
- 08 遅筆堂文庫二〇一八年度企画展  
「父と暮せば」著作資料展／  
井上ひさしコントの原点／  
「イーハトーボの劇列車」著作資料展
- 09 学芸員ノート
- 10 イベント紹介  
出前読書会／  
雑誌に埋もれる時間／井上ひさしの？本／  
井上ひさしの「履歴書」と「本棚」  
表紙の写真
- 11 川西中学校芸術鑑賞会  
こまつ座「父と暮せば」を観て／  
遅筆堂文庫利用案内
- 12 井上ひさしの言葉

講演

# 「わが友 井上ひさし」



井上ひさしのふるさと・川西町で四回目の開催となった吉里吉里忌。第一部講演「わが友井上ひさし」の講師は、学生時代からの友人である小川莊六さん。学生時代の思い出から井上ひさしが亡くなる間際のやり取りまで、長い付き合いだからこそ語ることができるエピソードを聞かせていただきました。

まずお互いが相手のことを何と呼んでいたかについてですが、小川さんは「井上」と呼び、井上は「莊六さん」と呼んでいたそうです。そして井上は小川さんと話しているとは必ず「莊六さんそれは違うよ」と反論し、持論を述べていたとのこと。「あいつ、私がこの講演で話すことにも「莊六さんそれは違うよ」と言っていそうなんです

よね」という小川さんの苦笑いからは、お二人の気の置けない関係性が垣間見えるようでした。思い出話は、学生時代のエピソードから「父と暮せば」の公演を見にロシアに滞在したことまで多岐にわたりました。大学には井上の小説に登場するモッキンポット師のモデルとなったとされるリーチ先生がいたそうですが、彼を懐柔しテストの時期を聞き出そうと食事をごちそうしお酒をたくさん飲ませるも、リーチ先生が酒豪で逆に自分たちが潰されてしまった上に何も聞き出せなかったという失敗談は、まるで小説の中のモッキンポット師と学生たちのやりとりのようで、会場からは大きな笑い声が上がりました。

最後に、小川さんは井上ひさしが亡くなる前に「莊六さんに煙草止めるよう言っておいて」という伝言を残したことについて、「井上がここに帰ってきてくれたら煙草をやめるつもりです」と述べました。まるで井上ひさしの小説や戯曲のようにユーモア溢れる思い出話の数々で、終始笑いの絶えない一時間となりました。

### 講師紹介

小川 莊六 (おがわ・そうろく)

1935年神奈川県横須賀市生まれ。61年上智大学フランス語学部フランス語学科卒業。株岡村製作所、横須賀市役所、株スーパードルミエ(現エスバシオ)取締役社長室長を経て、KSブレン代表。

講演

# 「井上ひさしさんのいくつかの思い出から」

第二部講演では演出家の栗山民也さんをお招きし、朝日新聞論説委員の山口宏子さんを聞き手に、井上ひさし及び井上ひさし作品の思い出についてたっぷり聞かせていただきました。

今回は、栗山民也さんに是非聞いてみたいことを事前に参加者から集めていたのですが、一番多かったのは「苦労したことは何ですか」という質問。それについて栗山さんは「全編苦労話になる」と前置きされました。そして、「しみじみ日本、乃木大将」は元々

自分を乃木大将だと思いついて、精神病患者が故郷の山口に帰るまでの船旅を描いた劇だったこと、「國語元年」にて鹿兒島弁担当の女優が「英語を覚える方がまだ楽だ」と泣いていたこと、「キネマの天地」にて稽古の途中で登場人物の名前が変更になったことなどを、笑いを交えてお話しされ、「とんでもない稽古場だからスケジュールを組むことがまず大変ですよ。でもその後十何本新作をやっていく上で、『あれっ、いつもだったら(台本が)四枚しか来てないはずが今日は六枚も来てよ!』と慣れていくわけです」と、井上作品に携わったもののしか語ることの出来ない強烈なエ

ピソードを語っていただきました。それでも「今振り返ってみるととても甘美で豊かで深い時間だった」「井上さんの仕事ではその場にいる全員が一つの共同体となり、掛算のような力の出し方が稽古場で生まれる。その時間はもう戻ってこないかなあと思うととても悲しくなることがある」と述べた栗山さんのお話に、会場の皆さんは真剣に聞き入っていました。

栗山さんは井上作品の魅力について「人間ってこんなに大きいんだ、こんなに強いんだ、こんなに美しいんだ、と毎回再確認できる」と発言。また、「どんなに大変でも、初日のカーテンコールで役者が笑みを浮かべながら挨拶しているところを見ると『ああ、やってよかったなあ』と感じる」と振り返りました。

最後に栗山さんは二〇一八年七月に上演を控える「夢の裂け目」への意気込みについて、「世の中はどんどん便利になっていくけれど、やはり人間は会話によって組み立てなければいけない、恋をしなければいけない、喧嘩をしなくてはならない。それを忘れたら人間が人間でなくなってしまう」とい

とに楔を打つのが文化や芸術であり、そう考えると井上さんはすごく貴重な人である。だから稽古に入れるのがうれし」と語りました。

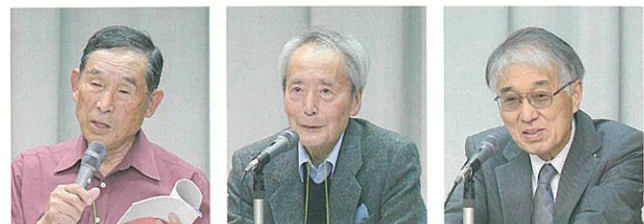
### 講師紹介

栗山 民也 (くりやま・たみや)

演出家。小劇場から大劇場、オペラの演出まで幅広く活躍。井上作品の演出は、新国立劇場『夢の裂け目』『夢の泡』『夢の窟』の東京裁判三部作、こまつ座『太鼓たたいて笛ふいて』『組曲産役』など15作品以上に及ぶ。紀伊国屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞など受賞多数。

テーマ

# 「大人が学ぶ『子どもにつたえる日本国憲法』」



今年で三十一回目を迎えた生活者大学校。今回は、元京都大学原子炉実験所助教授の小出裕章さん、憲法学者の樋口陽一さん、生活者大学校教頭の山下惣一さんをお招きし、日本国憲法を取り巻く問題やその背景、向き合い方について各々の立場からの見解を語っていただきました。

小出さんは、原子力と日本国憲法との関わりについて言及されました。まず二〇一六年六月に改定された原子力基本法により、日本は核兵器の保持のみならず使用も可能であると解釈できる状態になったと指摘。更に日本が現在保有している原子炉のプルトニウムで長崎型爆弾が四千発できると語り、「憲法の主権者は自分たちで、政府が間違えたことをしようとしたらそれを止めるんだという自覚が大切だと思いますし、井上さんは子どもたちにそういうことを教えるようとしたのだと考えると述べました。

樋口さんは、作品から読み取れる井上ひさしの憲法観について語りました。東京裁判三部作の最終作「夢の痲」や、巖流島の決闘で生き残った佐々木小次郎が宮本武蔵に再度決闘を挑む「ムサシ」を取り上げ、「自分自身が大変多くの血を流し、国民にも流させたという体験を挟んで、自分自身の近い歴史をもう一度改めて受け止めること、これが井上ひさしの一貫した憲法論ではないか」と述べました。

山下さんは「真打に大家の先生がいらっしゃるので、憲法はその方にお任せして私は農家の話について語りました。米生産の民間参入について「日本人の主食である米の管理から手を引いて民間に任せるといことは、米を金儲けの道具にしようとしていることと同じ」と語り、「安倍政権は農地法と漁業権を自由化することで戦後レジームから脱却し、日本を取り戻すことを図っている。漁業権の優先順位の廃止から始まったが、いずれはこれを農地法にも適用するだろう」と述べました。

### 講師紹介

小出 裕章 (こいで・ひろあき)

元京都大学原子炉実験所助教授。女川での原発事故への参加を機に原発をやめさせるために原子力の研究を続けることを決意。

樋口 陽一 (ひぐち・よういち)

憲法学者・東北大学名誉教授・東京大学名誉教授。憲法思想史や欧米諸国の憲法の研究を通じて、日本の平和憲法の持つ積極的意義を説き続ける。

山下 惣一 (やました・そういち)

農業・作家。農業に従事しながら国内外の農の現場を精力的に歩き、小説やエッセイ、ルポルタージュなどの文筆活動続ける。

# 吉里吉里忌プレ企画

「吉里吉里忌」で、地元の方々にも参加してもらえようという試みを」という趣旨でスタートしたこの企画。募集をかけたところ、県内一円より十代から八十代まで幅広い世代の方々（最高齢の方はなんと、井上ひさしの小学校時代の同級生）が集まりました。フレンドリープラザの子ども演劇教室で講師を務める佐藤満徳さんが指導に当たり、「聞いている人にきちんと伝えるような読み方」を目指して発声や表現方法などの練習を重ねました。



「吉里吉里忌」で、地元の方々にも参加してもらえようという試みを」という趣旨でスタートしたこの企画。募集をかけたところ、県内一円より十代から八十代まで幅広い世代の方々（最高齢の方はなんと、井上ひさしの小学校時代の同級生）が集まりました。フレンドリープラザの子ども演劇教室で講師を務める佐藤満徳さんが指導に当たり、「聞いている人にきちんと伝えるような読み方」を目指して発声や表現方法などの練習を重ねました。

## トークイベント 「目撃！井上ひさし 神田古書店街に行く」

二〇一八年十一月十日(土)

十月十日、井上ひさしが愛した本の街・神田にて、八木書店出版部社長八木乾二さんと小宮山書店の竹内利夫さんをお招きしたトークイベント「目撃！井上ひさし神田古書店街に行く」が開催されました。本の街で開催されたイベントということで話題も井上ひさしの本の扱い方に関するものが多く、「自分は日に五十冊読める」とりあえず目次だけ読めれば中身は後回しでもいいんだ」と八木さんに語ったエピソードや、本はじっくり立ち止まって選ぶのではなく、タイトルを見てすぐに決めていた。また本は棚と買っていたといった、竹内さんが目撃した井上ひさしの本の買い方などをお聞きすることができました。また井上ひさしの秘書を務めていた小川未玲さんや「イーハトーボの劇列車」などに出演した八木理香子さん(乾二さんの長女)からもお話を伺い、充実した時間となりました。

## 井上ユリ イタリア料理教室

二〇一八年十一月十八日(日)



神田イベントの翌週の十一月十八日、川西町農村環境改善センターを会場に、井上ユリさんによるイタリア料理教室が開催されました。二〇一六年にも開催され、大好評だったこの教室。参加者は日常的に料理をされている主婦の方々から普段あまり台所に立たない男性まで様々でしたが、ユリさんの丁寧な指導で全員時間内に作り終えることができました。今回のメニューは「きのこのリゾット」「豚肉と紅大豆の煮込み」「グリーンサラダ」の三品で、特に川西町の特産物・紅大豆を使った「豚肉と紅大豆の煮込み」は、煮詰めたトマトソースが豚肉と紅大豆にしみこんで美味しいと参加者にとっても好評でした。最後にユリさんは、「秋だから温かい料理にしたいけれど、もし夏に開催したら次は冷たいメニューにしましょうかね」と話され、参加者の方々から「楽しみ！」という声が上がりました。

## 文庫のおしごと

### 分室整理はじまりました

川西町交流館あいはる内にある遅筆堂文庫分室の整理が二〇一八年の夏から本格的に始まりました。分室の資料の中で一番多いのは雑誌。専門的な医学雑誌から大衆的な週刊誌まで、幅広いジャンルが揃っています。雑誌は本と違い、読み終わったら捨ててしまうことが多いと思われがちです。気に入った記事を切り抜いて保存しておくことなどはあっても、雑誌そのものを残しておくことは少ないのではないのでしょうか。けれど井上ひさしは膨大な、それこそ床が抜けそうな量の雑誌でも、捨てずに保存していました。井上ひさしの書籍愛は買うことだけではなく、一度手元に置いた本を大切にすることもあったのかもしれない。だから私たちはその愛を受け継いで、より一層丁寧に資料を扱わなければならないと改めて実感しました。



# 朗読の会 「星座」による 群読「子どもにつたえる日本国憲法」

今年の吉里吉里忌は一味違う！——吉里吉里忌2018では新しい試みとして、朗読の会「星座」による「井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法」の群読が行われました。



## 参加者の声

中学3年生の公民の授業では、「子どもにつたえる日本国憲法」を必ず紹介して日本国憲法について学んでいきます。むずかしい表現の多い憲法前文を井上ひさしさんはやさしく表してくださっているおかげで、生徒も納得しながら理解することができています。今回、妻と娘とも一緒に声を出しながら朗読の練習をくり返していくうちに、表現はやさしくとも意味はふかく、日本国憲法のここをわたちにするためには不断の努力が必要だということを強く実感するようになりました。この憲法のところが保たれることで、私たちがゆかいに暮らすことができ、そしてまじめに生きている人たちが大切にされる世の中であり続けるのだらうと思います。井上ひさしさん、ありがとうございました。(川西町・船木智幸)

「吉里吉里忌」で、地元の方々にも参加してもらえようという試みを」という趣旨でスタートしたこの企画。募集をかけたところ、県内一円より十代から八十代まで幅広い世代の方々（最高齢の方はなんと、井上ひさしの小学校時代の同級生）が集まりました。フレンドリープラザの子ども演劇教室で講師を務める佐藤満徳さんが指導に当たり、「聞いている人にきちんと伝えるような読み方」を目指して発声や表現方法などの練習を重ねました。



「吉里吉里忌」で、地元の方々にも参加してもらえようという試みを」という趣旨でスタートしたこの企画。募集をかけたところ、県内一円より十代から八十代まで幅広い世代の方々（最高齢の方はなんと、井上ひさしの小学校時代の同級生）が集まりました。フレンドリープラザの子ども演劇教室で講師を務める佐藤満徳さんが指導に当たり、「聞いている人にきちんと伝えるような読み方」を目指して発声や表現方法などの練習を重ねました。

4/13(土) 13:15~17:00(受付開始12:00)  
第32回 遅筆堂文庫生活者大学校

講演 「社会における公平とは何か」

山下 惣一 (農業/作家/生活者大学校教頭) 前川 喜平 (元文部科学事務官)

会場/川西町フレンドリープラザ  
参加料/1,500円(税込) <18歳以下無料>

交流会 4/13(土) [会場] JA山形おきたま本店2階  
17:45~19:15 [会費] 5,000円(税込)

4/14(日) 12:30~16:20(受付開始11:30)  
第5回 吉里吉里忌

会場/川西町フレンドリープラザ  
参加料/1,500円(税込) <18歳以下無料>

講演 「わが心のドンガバチョ、井上ひさし先生こんにちは」

若竹千佐子 (芥川賞作家) 聞き手 池上冬樹 (文芸評論家)

講演 「井上芝居とわたし」

角野卓造 (俳優) 聞き手 今村麻子 (演劇ジャーナリスト)



吉里吉里忌は、二〇一〇年四月九日に永眠した井上ひさしを偲ぶ文学忌で、代表作「吉里吉里人」から命名されました。会場は、生まれ故郷である山形県川西町の「川西町フレンドリープラザ」。ここには井上ひさしの蔵書二十万冊を収めた「遅筆堂文庫」を拠点に、井上自らが校長となつて、毎年開校してきた「生活者大学校」と、縁あるゲストがさまざまな視点から井上を語る「吉里吉里忌」の二つの催しを、二日間にわたつて開催します。

「父と暮せば」と

フレンドリープラザ

井上戯曲の「父と暮せば」はヒロシマ原爆をテーマにした作品であるが、川西町フレンドリープラザ(＝遅筆堂文庫)と意外な部分で関わっている作品でもある。この作品が書かれた一九九四年八月は、まさにプラザがオープンした時期。井上は、この芝居の主人公福吉美津江の仕事を図書館司書と設定した。そしてその司書の役割を父竹造が美津江に諭す場面がある。

人間のかなしかったこと、たのしかったこと、それを伝えるんが omai の仕事じゃろうが。

もちろん、井上はこの芝居のためだけに図書館に関する資料を蒐集したのではないと思われる。司書のための専門書や「図書館用語辞典」

企画展 I

「父と暮せば」  
著作資料展

会期：2018年5月22日(火)～7月29日(日)

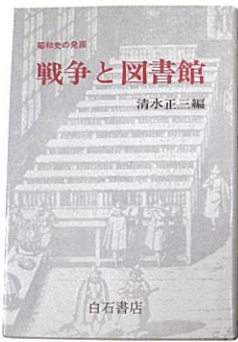
（図書館問題研究 宛合編、角川書店一九八二年）  
などは以前から読み込まれていた。今回の展示では、著作資料の内、図書館に関する資料を中心に展示した。



「父と暮せば」  
新潮社  
1998年



「図書館用語辞典」図書館問題研究会編  
角川書店 1982年



「戦争と図書館」清水正三編  
白石書店  
1977年



「広島県方言辞典」村岡浅夫編  
南海堂  
1981年

遅筆堂文庫

二〇一八年度 企画展



コントは

言葉、ことば、コトバの芝居

井上は一九六七年、それまでの放送作家からてんぶくトリオ(三波伸介、戸塚睦夫、伊藤四朗)の座付作者となった。この年から加速度的に仕事が増える。毎夕放送される「ひよこりひよたん島」に加え、てんぶくトリオの「昼のゴールデンショー」、さらには週一本の「ゲバゲバ90分」まで、コント作りに明け暮れる日々となっていた。

「てんぶくトリオのコント」第二集の「作者の言葉」で、井上は次のようなことを書いています。

コントと言うと、飛んだり跳ねたり相手を貼り倒したり、とかく動作にだけ注意しがちですが、コントは実は「見る」芝居と言うよりも、より多く「聴く」芝居であって、言

い換えれば「言葉、ことば、コトバ」

の芝居だと思われま

す。あくまでも言葉にこだわってコントを書いてる姿がみえる。

企画展 II

井上ひさし  
コントの原点

会期：2018年7月31日(火)～12月2日(日)

自分という

小宇宙のなかに

初演は一九八〇年十月五月舎で上演。演出は木村光一、音楽は宇野誠一郎、主演の賢治役は矢崎滋。

宮沢賢治を描いた評伝劇で再演が続いている人気作品である。この世に別れを告げて死の世界へ旅立つ農民たちが、あの世行きに長距離列車を待つ間に演じるという劇中劇のかたちをとっている。賢治や賢治の両親、妹という実在の人物と、賢治童話の中に登場する山男や風の又三郎らしき少年などが劇中で交錯する。あり得ない設定は井上芝居の面白さでもある。賢治自身の自己矛盾や自己犠牲、その葛藤を描きながら人間の弱さをえぐり出す。思い残し切符をまくラストシーンはずしりと心に響く。井上は一九八六年「the座」で次のように書いている。

科学も宗教も労働も全能もみんな大切なもの。(中略)一人がこの四者を、自分という小宇宙のなかで競い合わせるのが重要な。(中略)そうしないと、科学が、宗教が、労働が、あるいは芸能が独走して、ひどいことになってしまふよ。賢治がそう云っているような気がしてなりません。

今回は井上が読み込んだ「宮沢賢治全集」書簡、日記の巻(筑摩書房刊)を中心に、初演時の資料などを展示した。



「イーハトーボの劇列車」  
新潮文庫  
2019年  
新しく文庫本版が出版された。



「宮沢賢治とはだれか」  
原史朗著  
早稲田大学出版部  
1999年



「宮沢賢治語彙辞典」  
原史朗著  
東京書籍  
1989年

学芸員ノート

出遭い

遅筆堂文庫 学芸員 遠藤 敦子

遅筆堂文庫へは、熱烈な井上ひさしファンの方をはじめ、観光で立ち寄られる方、団体・学校・グループの研修としていらっしゃる方、電車の待ち時間で(米坂線は一、二時間の待ち時間となる場合がある)ふらりと立ち寄られる方などいろいろな方がお越しになる。

そのような中に随分熱心に遅筆堂文庫の棚を見て回っている一人の男性がいた。あまりに熱心に見ていらしたので思わず「大学の先生でいらっしゃいますか」と声をかけた。にんまりとした笑顔で「いいえ、違います。井上先生のコント関係の本を見たいと思います。この棚の他にはありますか」と仰る。続けて「実は私はテレビ番組製作会社の時代で放送された『てんぶくトリオのコント』を現代の役者で再現したら面白いではないかという企画を考えています。驚いた、これは一大事だ。寄託資料ではあるが直筆の、コントのネタ帳(右ページの写真「てんぶくトリオをネタ本NO.4」)を収蔵していることがアタマを巡る。直ぐに著作権継承者に連絡を取り状況を伝え閲覧許可を得る。

そこからはまるで想像をしていなかったことが次々と展開していった。コントのネタ帳を見て驚いたそのディレクターは、そのノートの存在も企画に入れたテレビ局に提出。「企画が通りました。三宅裕司さん演出、山口智充さん、中村獅童さん、田中直樹さんの三人の役者で「井上ひさしとてんぶくトリオ」という番組を作ることにしました。」という連絡が入る。メンバーの名前を聞いて驚き、「公開収録にいらっしゃいませんか」というおまけにまたまた小躍りした。

のちにそのディレクターはこう言った。「あの時(遅筆堂文庫を訪ねた時)、私に声をかけて下さらなければあのまま立ち去るところでした。」たまたまお声をかけたことで物事が想像もしていなかった方向へ展開した。

今日も文庫には遠くからお越しかと思われる方がいらっしゃる。ここは(たぶん全国の図書館や博物館でも)人と人の不思議な出遭いをもたらす場所である...ということ、地域おこし協力隊「遅筆堂文庫調査研究員」として三年間、頑張ってくれた山内七海さんに贈る。彼女は四月から新天地で、同業の仲間としてまた活躍する。

出前読書会 vol.2



「井上ひさし作品をより多くの町民の方に知っていただきたい」という思いで「昨年の秋に企画した出前読書会。その続編として、今年度の七月に出前読書会vol.2を昨年と同じ玉庭のよもやまサロンにて行いました。」

今回は絵本や紙芝居の読み聞かせに加え、株式会社GOBOUの代表 築瀬寛さんが考案したイス体操を読み聞かせの間に行いました。「もしもしかめよ」の歌に合わせて両手を交互に動かすという簡単な体操ながら、スピードアップするとつい左右同じ動きをしてしまったり笑い声上がるなど、微笑ましい一幕もありました。また読み聞かせでも、ページをめくることに愛あるツッコミ(ー)が入るなど、和やかな雰囲気を読書会となりました。

トーク

「雑誌に埋もれる時間」

井上ひさしの「本」

山形県置賜地方を会場に開催した十六日間のブックイベント「Book!Book!Okita 2018」。遅筆堂文庫でもコラボ企画として、最終日である十月七日に「雑誌に埋もれる時間」井上ひさしの「本」と銘打ったブックトークを開催しました。普段は文庫分室に収蔵している雑誌の一部を公開するというところで、今回紹介したのはキネマ旬報社の「キネマ旬報」過去三十年分など。「キネマ旬報」は現在も発行されている雑誌ですがさすがに三十年近く前のものとなると珍しいようで、参加者は「この映画見た！懐かしい」「あの女優さん、昔はこんな髪型だったんだ」と思い出話に花を咲かせていました。



井上ひさしの

「履歴書」と「本棚」



川西中学校の二階には、井上ひさし先生コーナーという名前の掲示スペースがあります。以前は井上ひさし関連の新聞記事の切り抜きなどを貼っていましたが、中学校の先生より「掲示物を新しくしてほしい」という依頼を受け、このたびリニューアルいたしました。スペースを「履歴書」と「本棚」に分け、「履歴書」では経歴や好きなものを履歴書形式で表現し、「本棚」では小説・戯曲の代表作を本棚の本に見立てて紹介しています。本は、表紙をめくるとあらすじが書いてある仕掛け付き。川西中学校における際にはぜひご覧ください。

今年度はこんなことがありました!!

■表紙の写真■

本の樹

遅筆堂文庫の中でも一際目を引くこの書棚は「本の樹」と呼ばれています。この書架に並ぶのは井上ひさしが手元に置いていた本……ではなく、全国の井上ひさしファンから寄贈された。おすすめの井上ひさし作品です。「次の世代の人たちにも、井上ひさしの作品を読み継いでほしい」という願いがこめられた本を開くと、作者へのメッセージや作品の感想などが書かれたカードがはさまれています。まさに井上ひさしへの愛で作りに上げられた書棚と言えるでしょう。

ちなみに寄贈は現在も受け付けております。ご希望の方は遅筆堂文庫まで。



《編集後記》

山形県でも有数の豪雪地帯である川西町ですが、今年は雪が少ない上に暖かい日も多く、過ごしやすかったですと感じております。とは言いつつ三月に入った現在もまだセーターを着こんでいますので、あくまで川西町基準の過ごしやすさではあります。

《遅筆堂文庫利用案内》

- 【開館時間】
- ◎火・土曜日
- 午前九時三十分～午後七時
- ※冬期間(十二月～三月)
- 午前九時三十分～午後六時
- ◎日曜日・祝祭日
- 午前九時三十分～午後五時
- 【休館日】
- 月曜日※月曜日が祝日の場合は開館
- 祝日の翌日・年末年始・図書整理期間
- 〒九九九〇一〇二
- 山形県東置賜郡川西町大字上小松
- 一〇三七番地
- TEL/〇三三八四六一三三三
- FAX/〇三三八四六一三三三
- メール/frendyplaza@gmail.com



川西中学校芸術鑑賞会

「二まつ座」  
「父と暮せば」を観て

川西町立川西中学校では、毎年「芸術鑑賞会」としてクラシックコンサートや落語、演劇を鑑賞します。今年は一〇一八年六月二十一日にフレンドリープラザで行われたこまつ座公演「父と暮せば」を全校生徒が観劇しました。その感想の一部をここで紹介いたします。

〈一年生 Uさん〉

私は、昨年の夏、広島に行きました。そこで原爆ドームなどに行きました。何の罪もない人が何人もぎせいになってしまったと聞き、生きていくことに感謝し、生きていくことや生きている時間を大切にしたいと思いました。戦後、自分だけ生きていることに申しわけない気持ちを感じた主人公も、最後には前を向いて力強く生きていて、「頑張れ」と応援したくなりました。とてもいい演劇で、とてもいい経験でした。

〈二年生 Eさん〉

原爆はとても恐ろしいもので、被爆者にとっては忘れたくても忘れられないものだということがわかりました。「みんな死んで自然、生きているのが不自然」というセリフには、どのぐらい大きな被害だったかが、伝わりました。たぶん、私も、同じ考えになってしまっているのではないかなと思います。日本は唯一の被爆国なので、これからも大きな被害や被爆者の想いを伝えていかないとけないと思います。



〈三年生 Tさん〉

僕は、今日の「父と暮せば」を観て、原爆が人にあたえたのは、体のケガはもちろん、心のケガも多かったんだと分かりました。この「父と暮せば」を通して戦争の恐ろしさを改めて感じました。だから僕は、このようなことを二度とくり返さないように、今日学んだことを、僕たちの次の世代へも伝えていきたいと思いました。

〈三年生 Wさん〉

「あの時と同じ」「だれかお父さんを助けて」という悲痛な叫びで、今自分が家族と友人と普通に過ごしていることがどれほど大切な事なのかということを感じました。社会で戦争について学んで、DVDを見たりして、原爆の怖さはなんとなくわかってました。でもその当時被害を受けた人がどんな気持ちで、どんな状況だったかを感じる事はできませんでした。今日の芝居は、本当にただの芝居なのかなと思うくらい心に響きました。たった一つの原爆が簡単に大切な人を奪ってしまうけど、少しずつ前に進んでいっている姿に感動しました。



### 吉里吉里志 2018

講演

- ・井上ひさしさんとのいくつかの思い出から
- ・わが友 井上ひさし

井上ひさしの言葉

変わってもらいたくない—  
 そのために行政を含めての  
 大冒険を期待します。  
 つまり「変わらないでいるための  
 新しい事業」を興してください。

「神保町アンケート」(「神保町が好きだ」創刊号に掲載)の  
 中の質問、「神保町に変わってほしいこと」に対する回答。  
 ちなみに井上ひさしの神保町お気に入りスポットは、万年筆の  
 「金ペン堂」とのことです。

